

無関心の壁

外国語学部 英語英文学科2年 星 薫

日本はアジア諸国の中で最も、そして世界中でも裕福な国であると言えます。欲しいもの、欲しい情報はいつでも瞬時に手に入ります。しかし私たちの得られる情報が増えれば増えるほど、それらの現実性や今この瞬間に起きているという危機感がうすれて、それと同時に想像する力もなくなってきたように感じます。「私たちが戦っているのは貧困ではなく無関心です」という文をユニセフ発行の手紙で見たときに、その「無関心の壁」を乗り越えるために私が今できることは実際に外国へ行ってみて、そこで見た物を出るだけ多くの人にどれだけのアリティーを持って伝えられるかということだと思いました。

高校3年の終わりにインドへ、今年の夏休みにカンボジアへ行ってきました。孤児院で働く

という経験をするためと、発展途上国と呼ばれる国々の現実と生活を自分の目で見るためです。ここではインドの孤児院での体験と、両国で何を学んだかについて書きたいと思います。

私の人生を変えたインドでの2週間は全てが驚きと勉強でした。インドのカルカッタにあるマザーテレサの施設は国籍、経験、男女関係なくボランティアとして働く事が出来ます。施設によってすることが違いますが大体自分の希望する施設で働かせてもらえます。今では施設は5つあり年齢、性別、病気の有無などで分けられています。私と友だちが働いたのはダヤダンという障害を持つ子どもの施設で、男女合わせて40人以上それにスタッフが7名ほどいたと思います。1階には男の子、2階には女の子が生



まず朝ダヤダンに着いて、エプロンを着て子ども達のもとへ向かいます。大体7時半位からスタッフが子ども達の体を洗っているの、その子ども達の体を拭

いて洋服を着せます。体に重度の障害があるために歩けなかったり動けない子ども達には、蒸れ防止のパウダーをつけてオムツをはかせた後に洋服を着せます。ある一人の男の子は両足が絡まったように曲がっていて動かす事が出来ませんでした。彼にオムツや洋服を着せるのはとても大変でした。足は曲がらないし、ムリに足を動かすと痛いと思鳴を上げます。他にはやんちゃすぎて走り回っている子を捕まえたり、目が見えないためにベッドの下に隠れて出てこなかったり、洋服が気に入らないと投げて騒ぐ子など、まさに闘いでした。着替えが終わると、今度は子ども達とおもちゃで遊んだり障害がさほど重くない子（目が見える、話せる子など）は絵を描いたり勉強をします。その間にも他の子ども達が急に泣き出したり、気づけばおしっこやうんちを漏らしていたりして、その子ども達の世話に追われます。今度はお昼時間になつて、みんなに首かけをつけ椅子に座らせます。スタッフが一人ひとりに合った分量のご飯とカレーをよそい、それぞれもらった順番に食べ始めます。インドではヒンドゥー教の教えにより食事中に左手は使えません。そのため子どもが左手を使うとスタッフから叩かれたり怒られたりします。しかし耳が聞こえず目の見えない

トーマスはなぜ怒られるのか分かっていないようでした。そのため彼はどんなに怒られても、泣きながら両手を使って食べていました。

食事が終わると今度はトイレの時間です。言葉で話せた子どもは2人か3人だけでした。そのため子ども達は食事が終わると強制的にオマールに座らされうんちをするまで座ってなければいけません。やはりここでも闘いでした。何人かの子どもたちはうんちを触ってみたり食べてみたりしてしまいます。しまいにはその手で私たちに抱きついて来るのです。トイレが済んだ子はまたシャワーで体を洗われ洋服を着せられベッドに運ばれます。おやすみ時間になるからです。まだボランティアと遊びたい子は騒いだり構って欲しいと抱きついてきます。そのためそのような子ども達のベッドには紐がついていて、足をベッドと結んでつなぐ事になっていました。ここで1日のボランティアの仕事は終わりです。エプロンはカレーと子ども達の排泄物と、そしてよだれや涙で泥んこ遊びの後のようにでした。仕事がどんなに大変でも、たとえ子どもが私に暴力をふるっても、帰ろうとすると嫌だといつて手を握ったまま離さない子や、指をしゃぶって寝ている姿を見ると、どうしてもかわい

く早く明日になって欲しいと願う自分がいました。そんなこんなで1週間はあっという間に過ぎてしまい、ダヤダンでの子ども達と過ごした日々や経験は忘れる事のできない大切な思い出になりました。私の髪の毛を抜いて食べる子がいました。何を言っても怒って私につばを吐く子がいました。私の膝に座ったままオシッコをもらしてしまった子がいました。それでもそんな子ども達が大好きでした。またダヤダンでのボランティアの人々との出会いも大切な思い出です。4日ほどしか一緒に過ごしていないアメリカの女の子に「In gonna miss you」と涙ぐんで言われた時には、ここでの経験は子どもたちだけでなくボランティアで訪れた人たちとも貴重な体験を共に分かち合い学ぶことができたと感じました。

カンボジアでの経験もまた素晴らしく、私に生きる喜びを教えてくださいました。また彼らはどんなに困難な状況においても「必死に生きる」という強さを教えてくれました。私がこの二つの旅から学んだ事は「強くなること」と「無知から脱出」であると思います。二つの国では、たくさんの子ども達に出会い生きる力をもらいました。彼らは特にカンボジアで出会った孤児



カンボジア孤児院の子どもたち

院の子ども達は、自分たちが自立して生きていかなければいけないことを知っています。何をしたら今の生活からもっとよりよい生活を手に入れられるかを知っています。彼らの目指すものがたとえ遠くにあると、彼らは自分たちがしてきた苦勞や育った環境を言い訳に、妥協をしたり諦めたりしません。むしろそれらを生きる力として懸命に勉強、アルバイトそして仲間を愛する事に力を注いでいます。また「無知からの脱出」は私が彼らに気付かされた事であり、また私の目標でもあります。ただ「助けない」という気持ちだけでは返って大きなお世話なのです。彼らの歩んできた歴史や、共に私たちが歩んできた歴史を知らない事は恥であり、無知こそ最も恐れなければいけない恐怖だと思いません。私はよく小学校の時なんで勉強をしなけれ

ばいけないのかと考えていました。しかし学ぶ事で得られる知識と出会いは素晴らしいものであり、どんなに高価なバッグや洋服より価値のあるものです。私はどんなに進歩する科学技術よりもなによりも、私たちが持つ心と、教養に勝るものはないと思うからです。ほかにももっとたくさん書きたい事がありますが、伝えきれないほどです。

私のインドやカンボジアの経験から、興味を持つてくれる方がいればとても嬉しいです。また実際に行きたいと思ってくれる方がいたならば私の課題である「無関心の壁」を乗り越える一歩になったのではないかと思います。